

月曜午後二時 空きゴマ

漫研の部室の鍵を管理しているのは名目上先輩方ということになっているが、実際には曜日ごとに入り口のあちこちに合鍵が隠されているので、合鍵の隠し場所を知っている部員ならいつでも部室を利用することができる。とはいえ、毎日いつでも誰かしらが部室にいるし、誰かがいる時は部室のドアも鍵も開けっ放しなので特に問題はない。

今日は俺と神谷が遊びに来るのと入れ違いで先輩方が講義に出ていくところで、後よろしく、と言われながら見送ると俺達二人きりになってしまった。二人でも楽しめないわけではないが、せっかくゲームを持ってきたからせめて誰かいてくれればいいのに。

「うーん……二人でやります？」

「いやでもこれ二人で回してもなあ」

「まあそうですけど。じゃあ座って話でもしますか、最近いい絵師を見つけたんですよ」

神谷が見せてきた「Twitter」の画面に表示された漫画は、女の子が男の子に催眠を掛ける内容のエロ漫画だった。

「ね、いいでしょう？」

「うわエロ……いいねしょ」

「あつ、僕のアカウントでいいねしないでくださいよ！」

「いいじゃん別に、ていうか鍵リスで監視してんの？ むっつりかよ」

「きみだって同じようなことするでしょうが」

「するけどさあ」

他にも見せたいものがあるんですよ、と言いながら神谷がスクロールするリスト内は、ざっと見ても催眠か女性上位が多い気がした。いや神谷の好みを知ってどうするんだという話ではあるのだが。

「あ、そのキャラ赤羽さんに似てる」

神谷がスクロールして飛ばそうとした漫画のキャラが同期の赤羽さんに似ている

と指摘すると、神谷はそれを隠すように指を動かし続けた。

「いやーそれにしても催眠なんて存在するんですかね」

「おい無視すんなよ」

「吉田くんは信じます？」

がちや、とドアノブをひねる音と同時にドアが開くと、噂をすれば影とはいうが、こんなに絶妙なタイミングで赤羽さんが来るとは思いもしなかった。

「催眠なんて……」

話を続けようとした神谷が入口の方を見て赤羽さんの姿を確認し、気まずそうに眼をそらしたのがわかった。ということはさっきの漫画、やっぱり赤羽さんに似ていると思っただろう。

「催眠のお話ですか？」

赤羽さんは普段あまり話さない。俺から見ても陰気で、物静かで、いつも部室の隅でじっと漫画を読んでいるか、これまた同期の明るくて可愛いうららちゃんと小

さな声で何かを話したりどこかに行ったりしているだけだ。その赤羽さんが話しかけてきたのが珍しく、俺は少し動揺してしまった。

漫研には俺達と同世代の二人しか女子部員がいない。その内の片方であるうららちゃんは誰にでも話しかけるし、甘えたりおだてたりと正にオタサーの姫だ。一方の赤羽さんは普通に地味なよくいるオタク女に見えるものの、俺達オタクの輪の中にも積極的には入らず、部室に來ても隅の方で漫画を読んでいるか、うららちゃんと一緒にいることが多い。とにかく謎めいているのだ。

「ああ今ちよつとね、センチティブなコンテンツをですねふふふ」

照れを隠したいのか何の臆面もなく言い放った神谷の神経は一周廻って凶太い。思わず感心してしまった。

赤羽さんはふんふんと相槌をうちつつ神谷が見せる漫画を読もうと顔を近付けてきた。髪か香水かはわからないが、バニラの甘い香りが鼻に届いた。赤羽さんとこんなに接近することは滅多にないのだが、たまにこうして近付くといつもこのバニ

ラの匂いがする。この匂いは嫌いじゃない、と思う。

「赤羽さんは、そのお……催眠術とかって信じるんですか？」

神谷、もしかして気まずいと口数が増えるタイプなのだろうか？ それとも単純に赤羽さんと話を続けたいのだろうか。俺が赤羽さんのことを何も知らないからかもしれないが、正直三次元の何が良いのか全く分からない。

「信じますよ。お二人はそういうの信じないんですか？」

「あつやっぱり？ ですよねー僕も信じてるんですよ催眠のこと」

「おい裏切るなよ」

俺と神谷のかけあいを見ていた赤羽さんはふふっと微笑んだ。あまり目が笑わな
い人なので一瞬わからないくらい笑顔だった。

「試したことないんですか？」

「えっ？」

「催眠ですよ。今どき簡単に手に入るでしょう、催眠音声とか、スクリプトとか」

思わず二人で同時に訊き返してしまう。この人はどうしてこんなに催眠の話題に食いついてくるのだろうか。もしかして赤羽さんもこういうエロ同人が好きなのだろうか。

「ああー……試したことないかな」

「ですかねえ……」

嘘だ。神谷はどうか知らないが、俺は催眠音声を一度だけ聞いたことがある。そうして自分の体にどんな変化が起こるか、はつきりとわかっている。催眠音声がイコールエロコンテンツだとは思っていないが、最初に試したものでそう刷り込まれたせいか、どうしても女子の前でエロい話をしているような気になって落ち着かない。

顔が熱い。赤羽さんがいつも浮かべる、こちらの思考を見透かしているかのような笑顔が今は特に嫌だ。前髪でできた影のせいであまり光を反射しない目も、見ていると吸い込まれてどこか深く深い底へと落ちていきそうで嫌だ。

「ね、神谷さん。こっちに来てくれませんか」

「いいですよ」

神谷は軽く返すと俺から少し離れて赤羽さんの目の前に座った。止めようかどうしようか迷っている間に、俺の目の前でそれは始まってしまった。

「目を瞑ってください」

自分に言われたのかと思いい体が跳ねたが、当然違う。言われたのは神谷の方だ。

神谷はといえば素直に従い目を閉じている。耳が赤いところを見ると恥ずかしいのだろうか。

それにしても赤羽さんが催眠をやるのか？ いや、確かに俺は赤羽さんのことを何も知らないが、同人誌やVのVのようなことが実際に起こるのか？ この、俺の目の前で？

「深呼吸をしてください。ゆっくり、そうです……息を吐く度、体のこわばりがわたしの手のひらに吸収されていく。そう。上手ですね……」

赤羽さんは目を瞑った神谷の肩を両手でつかむと、左右にゆっくりと揺らしていた。神谷が息を吸うと右、息を吐くと左、と呼吸に合わせるように揺らしている。

「ゆるらゆら、ゆるらゆら、ゆっくり揺られて気持ちいいですね」

赤羽さんの歌うようなテノールの声に、神谷が寝起きに出るような気の抜けた声で返事をする。俺は逃げることも動くこともできず、その様子を目の前で見せつけられているのだが、できる事なら逃げ出したかった。

神谷のそんなところを見ても何の得にもならないというのもそうだが、何より焦っているのだ。このまま見ていると自分にも赤羽さんの魔の手が及ぶかもしれない、と。何より赤羽さんだけには、胸の奥で勢いを増そうとしている期待と嫉妬を煽られたくない。

決して自分もそうされたいと思っっているわけではないのだ。決して、神谷ではなく自分に催眠を掛けてほしいなどとは思っていないが、赤羽さんの低い声に誘導されてトランス状態へと引き込まれていく神谷が羨ましいのは悔しいほどに事実だ。

「ほら、落ちていっちゃいますよ。暗くて深い底へ、底へ、底へ、沈んでいっちゃ
う」

見ていたくない。目を瞑ればいい、それだけのはずなのに、視界を閉ざすことで
暗闇に直面すれば赤羽さんの餌食になってしまいうので、嫌でも目の前の光景に集
中してしまふ。

赤羽さんは一瞬強く肩を掴み少し持ち上げるように力を込めたあと、突然手を離
した。

「沈む」

そう言った直後だった。神谷の体は糸が切れたように力を失い、だらりと赤羽さ
んに倒れ込んだのだ。指の一本、脛の一枚までも力が抜けており、骨があるはずの
人体でも力が抜けると不思議にぐにゃぐにゃしてしまうのだなと他人事のように思
う一方、自分もそうして赤羽さんに力を奪われ倒れ込んでしまいたいという欲望
を、爪が食い込むほど握りしめた手で必死に抑えている。

「カウントダウンをしてゼロになったら、神谷さんは猫として意識を戻します。

三、二、一、ゼロ」

部室に響いた指を鳴らす音に、俺も神谷も背中を震わせた。座ったまま赤羽さんに抱きかかえられていた神谷はそのまま横たわると、にゃあ、と一声鳴いた。

あ、あ。神谷が猫になっている。四つん這いで伸び、揺れるものに手を出し、赤羽さんに顎の下を撫でられて悦んでいる。赤羽さんの暗示が効き、猫になってしまっている。

赤羽さんはしばらく満足そうに神谷を見下ろして撫でたり遊んだりしていたが、ふと顔を上げて俺のことを真っ直ぐ見据えた。

「催眠を信じていない割に興味津々なんですわね」

声は脳幹に直接刺されたように響いた。満足げな笑みだが、断じてそればかりではない。今まで気付かなかったが、赤羽さんの目は獲物を見る目だ。そして獲物は神谷だけではなく、俺もなのだ。